

模範授業や「学び合い通信」で 目指す授業像を共有し、校内研で深める

愛知県 小牧市立北里中学校

子どもの主体性を育てるために学び合いを導入した小牧市立北里中学校。当初は取り組みがスムーズに進まなかったが、全校で目指す授業像の共有と実践を進めてきたことで、学び合いのある授業が浸透してきた。

生徒の現状と 学び合いで特に付けたい力

- 純朴で素直に指示に従うが、主体性に欠ける
- 他者を認め、他者とかかわり合いながら自己を高めていこうとする意欲が弱い
- ➔ 他者を認め、他者と高め合いながら、自らの考えで判断し、行動できる自主性

学び合い導入の経緯

- 5年前に全校で取り入れたが、浸透しなかった
- 模範授業や「学び合い通信」を発行し、教師間の共有が進む
- 2009年度から研究指定を受け、全ての教師が良さを実感し、研究指定終了後も学び合いを深めている

学び合いの概要

- 「学び合い通信」を発行する
- 月1回の校内公開授業を行う
- 公開授業前の事前検討会「授業を語る会」では、教科を超えて学び合いのイメージを共有し、深める

学び合いの工夫

- 学び合いをマニュアル化せず、生徒の反応を見ながら、グループでの学び合いや一斉指導を取り入れるタイミング、時間を考える
- 公開授業前の「授業を語る会」、公開授業後の研究協議（事後検討会）、「学び合い通信」を通じた目指す授業像の構築

School Data

◎ 1947（昭和22）年開校。農村地帯と住宅地が混在する地域にある。2009年度から2年間、小牧市からの指定を受けて、「まなびを楽しむ学校をめざして」をテーマに校内研究を行った。



校長◎ 安藤和憲先生

生徒数◎ 444人 学級数◎ 15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎ 〒485-0051 愛知県小牧市下小針中島 2-170

TEL◎ 0568-73-3171

URL◎ <http://www.komaki-aic.ed.jp/kitasato-j/>

公開研究会◎ 2011年11月21日（月）、2012年3月15日（木）

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

学び合いのある授業で
主体性を育てたい

板書はノートにきれいに写すが、丸写しするだけで自分の考えはほとんど書き加えない。宿題にはしっかりと取り組むが、それ以上の学習はあまりしない。安藤和憲校長は、赴任当時、生徒のそのような姿勢に課題を感じたという。

「生徒は純朴で教師の指示に素直に従いますが、もう一歩進んで、自ら考え判断して行動する主体性や、他者を認め、他者とかかわりを持つて自己を高めていこうとする意欲が弱く感じました。友だちと協力して話し合いながら、自分の考えをより深く、より広いものにしていく。そうしたかかわり合いのある授業を通して、自主性を身に付けさせたいという思いで、5年前から全校で授業に学び合いを取り入れていきます」

考えを深めたり、主体性を高めたりするために、なぜ学び合いが有効だと考えるのか。国語科担当で1学年担任の坪井小枝先生は、日々の指導を通して次のように感じていると話す。

「学び合いでは、相手に自分の意見を伝える必要があるため、『考えなければ』という意識が働きます。更に、友だちの考えと比較して、自分の考えを磨くことができます。一斉授業でも考える場面はありますが、生徒に

よつては、受け身の姿勢で聞いているだけで授業が終わってしまうことがあります。一人ひとりの生徒が、自分の頭で考えたことを自分の言葉で目の前の相手に伝える場面のある学び合いは、生徒の主体性を育てるのに有効だと捉えています」

生徒が答えを「つくり上げる」姿を見て、目指す授業像が明確に

しかし、導入当初、取り組みはスムーズに進まなかった。

学び合いを行うには、まず生徒が話し合いやすい環境を整えることが必要だと考え、全ての授業でグループ活動や「コの字型」の机の配置を取り入れた。ところが、従来の指導との違いに戸惑う教師が多く、学び合いは学校全体に浸透しなかった。

「最大の問題は、教師が『よい学び合いとはどのような状態か』という目指す授業像を持つていなかったことでした。グループ活動などの『形』だけを取り入れても、生徒の学びは深まらなかったのです」(安藤校長)

その状況が好転したのは、4年前に永田春季教頭(当時は教務主任)、3年前に教務主任の林文通先生が赴任し、学び合いのある授業を行い、他の教師に見てもらったことがきっかけだった。2人とも前任校で学び合いを授業に取り入れていて、豊富な経験があった。林先生は次のように振り返る。



小牧市立北里中学校校長
安藤和憲 Ando Kazunori

「教師は人を育てられる有難い職業。「人づくりは心づくり」の気持ちで、真っ直ぐな心を持つ生徒を育てたい」



小牧市立北里中学校教頭
永田春季 Nagata Haruki

「情熱を持ち、生徒にとって印象深い教師でありたい。教頭として、言いづらいこともきちんと教師に伝える」



小牧市立北里中学校
林文通 Hayashi Fumiyuki

「プロとして授業をすることを楽しめる教師でありたい。生徒には学ぶことの楽しさを伝えたい」



小牧市立北里中学校
坪井小枝 Tsuboi Sae

国語科担当、1学年担任。「生徒が自分で考える余地を残した指導をし、生徒の知恵を借りながら学級をつくる」

「発問の仕方や教材提示の工夫により、生徒に自分の経験や気付きを発言させ、教師がそれらをつなぐことで、生徒に『自分たちで答えを導いた』という実感を持たせる。そのような授業を行い、先生方に学び合いの方法や良さを感じてもらいました」

教師が答えを「教える」のではなく、子どもが答えを「つくり上げていく」。林先生の授業に生徒たちが引き込まれていき、学びを楽しむ姿を見て、他の教師は、学び合いのある授業とはどのようなかを思い描くことができた。こうして、校内に前向きに取り組

もうという空気が生まれていったという。

しかし、目標とする学び合いのある授業のイメージができて、自分の授業で実践するのは容易ではない。林先生は、空き時間に他の教師の授業を見て回り、学び合いの場面で「まなびを訪ねて」というプリントにまとめて、配布した(写真)。例えば、国語の授業で「意味を調べながら、どの生徒も詩を物語り始めていました。自分の読み取った詩の世界を、自分の言葉で伝え合っているのです」と生徒の様子を具体的に伝えた。

「『こういう風にすればいいのか』と感じてもらえるように、学び合いを深める発問や学



写真 林先生が他の教師の授業を回ってまとめた「まなびを訪ねて」。現在まで18号を発行し、今も継続中。学び合いの具体的な手法を共有する情報源となっている

び合う生徒の姿など、できるだけ具体的な場面を紹介し、目指すべき学び合いに近づくにはどうすればよいかを説明しました。これを教師全員に配ることで、学び合いに対するイメージの共有が進みました(林先生)

しかし、中には従来の指導にこだわった教師もいた。そういう教師には、「具体的な指導法は変えなくてもよいが、学び合いの考え方は共有して取り入れてほしい」と伝えた。

教師の足並みをそろえる契機となったのは、2009年度から2年間、小牧市教育委員会から研究指定を受けたことだ。それまで学び合いに抵抗感を持っていた教師も、校内研究に取り組む中で実践せざるを得ない状況が生まれた。永田教頭は次のように話す。

「研究指定を受けたことで、教師全員が同じ方向を向くきっかけができました。学び合いに前向きではなかった教師も、実際に取り入れてみて、子どもが積極的に話し合う姿を目の当たりにし、学び合いのよさを実感できたようです」

ベテラン教師はもともと経験が豊富なため、自分が納得して価値を認めさせれば、学び合いのある授業に転換するのは早かったという。

「教師の中で最も指導法が変わったのは、最初は最も学び合いに懐疑的で、一斉授業にこだわっていたベテランの教師でした(安藤校長)

「授業を語る会」で教科を超えて教師が学び合う

校内研究を通して目指す授業像や生徒像が明確になり、更なる授業改善の必要性を多くの教師が感じたことから、研究指定の終了後も授業研究を続けている。

中心となるのは、月1回の公開研究会だ。特に、その事前検討会に当たる「授業を語る会」は、教師間での学び合いのイメージを共有すると共に、同僚のつながりを深める上で大きな役割を果たしている。かつては教科部会ごとに事前検討会を実施していたが、担当教師が1人しかいない実技教科もあることから、「教科を超えて皆で話し合おう」という会に変えた。

「授業者は『事前検討会で出された意見を授業に反映しなくてもよい』というルールにしました。いろいろな意見を取り入れて、自分の授業でなくなつては意味がありませんし、アイデアを出す側も『こんな導入が面白いかも』『この課題は分かりづらい』など、思ったことを気軽に発言できます(林先生)

「授業を語る会」への参加は自由だが、校長や教頭を含め、毎回、ほぼ全ての教師が参加している。全員で一緒に授業をつくっている感覚が持てるという。また、会を通して、事前に授業を見る視点が定まるため、事後検討会での協議の論点も絞りやすい。このよう

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

に事前検討会から事後検討会までが上手く連動していることで、教師の参加意識が強くなり、校内研究の効果が高まると考えている。他教科の教師からのアドバイスは、しばしば授業の大きな改善につながるといふ。

「例えば、社会科の教師は資料の提示の仕方に長けているなど、それぞれ得意分野があります。それらを教科を超えて共有することで、『それまでは考えたことがなかったような授業』が実現できるのです」（安藤校長）

教師も生徒も「学びを楽しむ」

学び合いのある授業を通して、生徒はどのように変わってきたのか。まず、教室や廊下での生徒の会話の様子が目に見えて変化しているという。

「全体的に落ち着いたトーンになり、大声で騒ぐ姿があまり見られなくなりました。相手の話をよく聞いて、周囲に気を配れるようになったのは、学び合いの効果の一つでしょう」（永田教頭）

授業では、教師の発問に対し、「単語」ではなく、「文章」で答えられるようになったことも、学び合いと大いに関係がある。

「先生方が子どもの話し合いを深めるために、『なぜ、そう思ったのか』『今の発言はどこに書いてあるのか』など意識して根拠を聞くようにした成果だと思います」（安藤校長）

また、生徒の学びに向かう姿にも変化が見られる。

「授業時間内に共有できなかったことを、授業後、真剣な表情で共有し合う姿が見られるようになってきました。生徒が学びを楽しむようになってきたと感じます」（坪井先生）

生徒の変化の背景には、教師の変化がある。「授業を語る会」や事後検討会では、校長を含めた教師全員が、役職や教科に関係なく、自由に意見を交わし合えるようになった。公開授業以外にも、日常的に授業を見合うことが増えており、教師も学びを楽しんでいる。

「より良い授業をつくっていくことは、苦しいけれど、楽しいことです。そういう経験を共有しながら、皆が前向きな気持ちで研究に臨むことで、指導力が底上げされつつあると思います」（林先生）

同僚性が高まり、コミュニケーションが活発になったことは、生徒にも良い影響を及ぼしている」と安藤校長は話す。

一方、学び合いを適切なタイミングで授業に取り入れるために必要な、生徒を見取る力も高まってきたが、まだ課題を感じることもあるという。

「学び合いを促すための発問やそのタイミングは、生徒の姿をよく見ていないと判断が難しいです。生徒が十分に課題意識を持ち、誰かと相談したいという気持ちが高まったタイミングで取り入れなければなりません。生

徒を見取る力を高めることに終わりはありません。これからも取り組んでいきます」（永田教頭）

6年間の研究を通して実感しているのは、研究の蓄積の大切さだ。生徒や教師は徐々に変化するものであり、継続が重要である。

「全員が参加することで、教師個人の成果ではなく、学校全体の成果として蓄積される研究にしたいと思います。学び合いにマニュアルはありませんが、校長や管理職が異動しても研究を継続するための研究のマニュアルはつくりたいと考えています」（安藤校長）

安藤校長が考える学び合い

学び合いの基本は、相手の話をきちんと聞くこと。教師同士、教師と子ども、生徒同士に壁があったら話を聞こうという気持ちになりません。学級や学校の雰囲気づくりが学び合いの土台になります。これまでの研究で、教師の支援によって子どもたちが変わることを実感しました。主体性に欠けていた生徒たちが、学び合いを通じて意欲的な集団に変わりつつあります。しかし、学び合いはマニュアル化できるものではなく、我々の研究に完成形はありません。常に発展途上だと意識し、方向性を明確にして全校で取り組んでいきたいと思ひます。

1年生の国語、2年生の数学の授業に見る学び合いの様子

北里中学校の授業で学び合いはどのように取り入れられているのかを紹介する。

1年生国語 授業者・坪井小枝先生

●学び合いのポイント「リンキンボムを使う」

友だちからアイデアをもらい、それがリンクし、化学反応を起こして爆発（ボム）するかのようアイデアを出す手法。4人グループで行い、1人が題材を提供する役 **A**、2人が質問役 **B** **C**、1人がやりとりを評価する（褒める）役 **D** となる。質問のルールは、○か×で答えられるものは出さないこと。

●授業の概要

2学期最初の国語の授業。夏休みの思い出をスピーチするための題材探し为本時の目的。

●授業の流れ

- ①プリントに「夏休みにしたこと」を5つ書く。
- ②その中から、「夏の一品」を決め、スピーチをすることを伝える。
- ③スピーチの中身を広げるために、4人グループで「リンキンボム」をする。

●「リンキンボム」の場面①

- B** 「どうやって質問したらいい？ 思い出すようなことだよな。分かっていることはだめで」
- A** 「そうそう、相手があまり分かっていないこと、覚えていないことを質問しないといけないだよな。うわー、質問難しいね。いや、難しいわ。じゃあいくよ」
- A** 「僕は、夏休みに寝相が悪くて、扉を開けて廊下までいってしまいました」
- B** 「本当に？」
- A** 「本当に」
- B** 「でも、それじゃ何を質問すればいいか分からんやん」
- A** 「そうか。じゃあ、他のものに変えよっか」
- A** 「僕は夏休みにサッカーの夏合宿にきました。これは？」

学び合いのポイント

相手が質問しやすい一品を探すことが思った以上に難しい様子。Aくんはまだ「夏の一品」が決まっていなかった。いろいろな思い出を話す中で、質問が広がりやすい「夏の一品」を探し出そうとしている。

●「リンキンボム」の場面②

- D** 「次は誰がやる？ いいや、自分が評価役をやるよ」
- A** 「私は夏休みに弟と散歩をしました」
- B** 「どこに散歩に行きましたか」
- A** 「引越してきたばかりで、まだ小牧のことを全然知らなかったから、家の周りを散歩しました。スーパーとか」
- D** 「2人がお互いの目を見ながら、具体的な話し合いをしていたのがいいと思いました。また人の話を真剣に聞こうとしたところもよかった。こんな感じ？ じゃあ交代」

学び合いのポイント

「弟と散歩をした」という記憶から出発し、質問によって「引越したばかりで小牧のことを知らない」「まず家の周りを知ろうと思った」といったエピソードや気持ちが引き出されている。

●「リンキンボム」の場面③

- A** 「私の一品は、いとこと撮った写真です」
- B** 「じゃあ、いとこの名前は？」
- D** 「どうでもいい質問じゃない？」
- A** 「上の子が○○で、下の子が△△」
- C** 「どこで撮ったんですか」
- A** 「えーっと、どこだっけ」
- D** 「山とか？ 海とか？」
- A** 「キャンプ場。山の中」
- D** 「素敵じゃん」
- A** 「山の中というか、芝生が広がっていたな」
- B** 「じゃあ、山の中のキャンプ場の芝生ってことね」
- A** 「そうね」
- D** 「すごく素敵な一品だと思いました」



リンキンボムの様子

学び合いのポイント

いとこと撮った写真の撮影場所を質問されたことで、具体的な状況を思い出そうとしている。

教師の振り返り

坪井先生「スピーチの題材を決めて内容を1人で考えても、なかなか話が膨らみません。友だちから質問されることで、忘れていたことを思い出してほしいと学び合いを行いました。想定外だったのは、多くの生徒が質問の難しさに戸惑っていたことです。冒頭で、答えが広がりやすい質問の例をロールプレイなどで示すべきだったかもしれません。ただ、良い質問をすれば、たくさんのお返事が返ってくるという経験から、最終的に『質問の内容によって答えが変わる』ことを多くの子どもが理解していました。この経験は、今後、学び合いに良い影響をもたらすと思います」

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

2年生数学 授業者・佐藤史洋先生

●学び合いのポイント「グループ活動を効果的に活用」

授業は、コの字型の机配置で始まり、途中で2回、4人でのグループ活動を行った。グループ活動の回数やタイミングは、事前に決めていたわけではなく、生徒の反応を見て、教師が導入を判断した。

●授業の概要

連立方程式を利用して、距離・速さ・時間の問題を解く。問題文が長くなり、数量関係が把握しにくいいため、不得意な生徒が多い課題。
・学習課題

全長10kmのハイキングコースを歩きました。スタートからコースの途中にある滝までは時速6km。滝からゴールまでは時速2kmで歩いて、4時間かかりました。スタートから滝までの道のりと滝からゴールまでの道のりを求めなさい。

●授業の流れ

- ①本時の課題を提示し、生徒が読み上げて確認する。
- ②距離・速さ・時間の関係を簡潔に復習した後、個別に問題に取り組みせる。
- ③ほどなく「先生、やり方が分かりません」という発言があった。これを受けて「グループでやってみましょう」と、グループ活動に入る。

※生徒が新しい問題に迷い、誰かと相談したくなったタイミングを見計らってグループ活動に移行した。

●グループ学習の様子

- A 「僕は『みはじ（道のり・速さ・時間）』とか習ってないから」
- B 「前にやったやん（笑）」
- A 「知らないって」
- C 「全長が10km。距離÷速さだから、 $x \div 6$ 、 $y \div 2$ 。6と2の分母をはらうために最小公倍数をかけて……。あ、間違えた」
- D 「（隣で見ていた生徒が）何で。そっちで合っているよ。 x を引くとこれでなくなるやん。『 $y - 3y$ 』でマイナスやん」
- C 「なんて、もう1回言って」
- D 「（線分図を指しながら）ここからここまでが10kmで、ここからここまでが4時間。滝からスタートまでの時間が $\frac{x}{6}$ で、滝からゴールまでが $\frac{y}{2}$ 。これは時間を求めている」
- C 「そうか、これ時間だったの？」
- D 「そうそう。だから……」

——— 学び合いのポイント ———

何となく立式までたどり着いたが、今ひとつ x と y の意味を理解できていなかった。隣の生徒の一言をきっかけにできた立式の手順とその意味を再確認している。生徒の理解度には差が見られるが、グループ全員でこれまでの知識を出し合い、立式にたどり着こうと試行錯誤する姿が他のグループでも見られた。

●全体での学び合いの様子 T: 教師

グループ学習が始まり20分ほどしたところで、机をコの字型に戻す。立式までの手順でつまづいている生徒が多かったため、グループで話し合ったことを発表してクラス全体で確認し、「みんなの考え」に発展させる。

- T 「じゃあ、みんな確認して」
- E 「何回やっても答えがマイナスになります。プラスですか？ $x + y = 10$ しかできません」
- T 「 x は何かな？ スタートからの道のり。 x はスタートから滝、あともう一つの式をどうするか」

F 「 $\frac{x}{6} + \frac{y}{2} = 4$ 時間」

T 「みんな、この式はよかったかな？ じゃあ、どんな式ができた？」
(なんとなくうなずく生徒が見られるも、まだ納得しきっていない様子)

G 「まだ分かりません」

T 「ちょっと聞いておきたいのだけど、 $\frac{x}{6}$ って何？ 単位は何？」

◎佐藤先生が生徒のつまづきを黒板で線分図に示しながら、一つひとつ説明。立式の手順とそのポイントを再確認した。その後、新しい問題を配り、もう一度、立式をさせる。個々に考えさせた後、再びグループ活動を行った。

授業後の研究協議で出た先生方の発言

◎学び合いでは、学ぶのは生徒なので、自分の始めたいところからスタートして、自分のペースで進める。だから、ゴールもプロセスも個々に違います。学びとはたどり着いた先得るのではなく、過程で生じるものだと思います。教師は当然、任せっ放しでよいわけではなく、生徒を主役にしながら力を付けてあげたい。では、この授業で付けなければいけない力とは何だったのでしょうか。

◎「 $x + y = 10$ 」が出た時、それに対して先生は「 x って何？ 単位は何？」などと発問しました。ここを分かったふりをしている生徒に「 x と y を使うのか。では、この場合、何を x にして、何を y にするの」と問い、もっと何が問われているのかを確認させたり、更に「どうしてそうするのか」と掘り下げることができたのではないかと思います。

◎生徒が考えながら取り組むことが大事。生徒は「分からない、分からない」と言いながらも、最後まで問題に向き合っていました。なぜそれができたのか。学力に差はあっても、その差を把握して、支え合うクラスをつくることでできているからだだと思います。そこがよかったです。